

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 菅原令子

本論文は、和辻哲郎以来、近世日本倫理思想史研究において重要なテキストである近松門左衛門の諸作品に対する精密な解釈を踏まえ、近世日本の人間観、秩序観の解明を目指したものである。その際、各作品における「敵役」の描かれ方に注目し、そこから近松の構想した近世日本の人倫世界像を浮き彫りにした点に、本論文の独自の視点がある。

全体は序章と第一～四章から構成される。序章では、主要な先行研究を概観しつつ、先行研究でも近松作品における情念の表出について言及してはいるものの、それが物語の結末において「太平の世の寿ぎ」へと帰結している点についての検討が不十分であると指摘する。つまり、先行研究では、個的な情念と秩序とは、二律背反的なものと見做されるに留まり、個的なものと公共的なものとの矛盾葛藤をダイナミックに止揚しようとした近松の意図が汲み取られていないという重大な問題があるのだ。このような問題意識の下、第一章では、近松の時代物である「出世景清」が取上げられ、物語世界における個的情念と秩序との関係についてテキストの周到な分析が行なわれる。その結果、自己の主君に対して誠実に献身する景清は、その情念の激しさ故にこの世の秩序をはみ出し反逆者になるものの、頼朝にその情念ごと承認されることによって頼朝が創り出す公共的秩序の中に最後は位置付けられるという、人倫関係に殉じる激しい情念ゆえの公共的秩序からの逸脱と権威による回収を通じての秩序の更新という構造が示される。そして、景清の敵対者としては、人倫関係において不誠実で私欲に満ちた人物像が提示される。敵役は自己を規定する関係を持たずそれ故に人倫の破壊者として最後は破滅するのだ。第二～四章では、近松の世話物の物語世界の分析を手がかりに、過剰な情念は心中などの形で一端は人倫的世界から逸脱しつつも、最後には「恋の手本」(「曾根崎心中」)とされ、死さえ恐れない誠実な信頼関係という人倫的秩序の理想を過激な形で示すことで秩序を更新すると主張する。敵役についても、自己を規定する関係からの逃走者として一貫して描かれていると指摘する。

本論文の意義としては、まず、これまで近松の倫理思想史的研究において殆ど扱われて来なかった時代物を取上げその思想構造を丹念に浮かび上がらせ、それが世話物を規定する構造と共通性を持つことを指摘したことが挙げられる。また、精密なテキスト分析によって敵役像を掘り下げ、それを通じて近松の理想の人間像、またその背後にある秩序観を明らかにした点も、本論文の大きな学的貢献といえる。ただし、時代物、世話物を通底する共通構造の探究に議論が集中し、それらの具体的な差異、とりわけ主従、家族、男女関係それぞれの人倫関係としての差異相の詳細な検討については今後課題を残した。また、中世の仏教信仰に基づく物語類型との断絶、克服が強調されたために、近松の物語世界における仏教の位置付けがやや表面的になってしまったきらいがある。しかし、全体としては、近松の思想構造を独創的観点から説得力をもって論述している。よって本審査委員会では、本論文が博士(文学)の学位を授与するに相応しいものと判断する。